俳諧十論

始

中村俊定文庫
文庫 18
175
1

第一 俳諧傳　第二 俳諧道
第三 俳諧徳　第四 虚實論
第五 姿情論　第六 俳諧地
第七 修行地

十知

芭蕉庵 深川ニ舊跡アリ今万年橋ト云橋際ニ松平遠江ノ御屋鋪アリ
其内ニ猶名ヲノ古池存セリ

録ハ記也

稾ハ文草也
韻会ニ文草曰ト稾未修治也史屈原傳
屬草未定漢孔
光傳削草注服虔
曰言已繕寫輒削壞
其ヲ

無用ナルモノハラカレクサヒ
レキモノ也

俳諧十論　附序

東華坊 述

あるゝ武江の芭蕉庵にて。茅舎をとゝのへ。
ひろうむし。文を論じ。述而ふるゝ。いにしへの維摩
の向疾にあたゝ。十論とするよ。行をとゝのへ
て例のゆゝしく。今や世間の俳諧とするに
其のゝはなの有るゝ。人のちゝをもて
苟にもゝ。俳諧を。無用の喩に。冬籠
そゝ。例のおゝく。表おもての

古今ノ俳人只サルロトノ作トノミ賞ヘタヲイ、破ル為ナレハ維摩ノ弾呵ニナソラヘテ論ス

述而不作ハ孔子モ論者ノ作ヲ述ヘシ也

「言忘ハ是ニテノ俳諧ノ

修行ハ培モナキ所ニヨイテイヒユヘニ
無味ノ正味ヲサトセヨトノ心ニ取リ

滑稽列傳

孔子曰六藝於治一也禮以節人樂以發和書以道事詩以達意易以神化春秋以道義太史公曰天道恢々豈不大哉談言微中亦可以解紛

（種〈諸〉子技〈技藝〉度〈度〉藝）

●希逸カ老子經序矯世憤俗トイヘル其教ニハ人和ナシ俳諧ハ談笑ノ和ヨリ五倫ノ訊諫ヲ道トス老莊ト各別ナルヲ知ベシ

世ばなれあやしく人のかたらんまでもあるべきものおこがましくもとかるるものなれば我らかくとさとしたるを人数ラスト忘ル人ナミニモ思ハレズトモ

かつてくるしみなくきれあるむ性をたくむこと実あれど口金の費とおそるべし。梓のはたらき及ばざるきけなる世論をも。和書之ヲ語ルトキニ私ノ庵の造作

史ノ張儀傳ニ衆口鑠金ヲ積毀銷骨ヲ

ることあるやうにたとへの費いとまなくして生活ありて美濃ありとや世論ありや私ふんまふかく

佛經ニ世間相ヲ立テテ人天ノ変ヲ云ヘリ変ニハ年月ノ変化ナリ

この世の貴賤とかるるにあらずいかにせんと雅と世俗ふ

急ニセムルモ緩ニセムルモ全ク虚実ニシテ言語ノ無用ナルヲシレヘシ

へるも例の俳諧の虚実ふるふ例の文章の過當

なる誤ることいとうるること

右八人ノ事跡ナリ

京都帝國大學圖書之印

姚氏名察

○人々日夜ヲ知ラズシテ言語ノ実ヲトルアルトキハ一字保ノ選訓ムベシ

才一俳諧傳

扨も俳諧の伴とふふるまひは史記ニ滑稽の名ありて齊楚の比より秦漢の間ヤテに七八人ハ言行ヒ多シ本史云ふ天道の賛詞より或ハ笑言

司馬遷

ともて大道ヲかふるもし或ハ談笑ヒトリて訓誡ヒトモ

●滑稽ハ酒桶の喻ヒるるし姚氏ハ俳諧のこゝろ

晴亮ハ虚実の自在ヒるし言語ヒあてふのいひふんれへ俳諧の及ぶるやヒトリ虚実の誹ふんふこもるい

シカレハト前ノ言語ハコヲウケテ

誹ヒキ

之皇又帝より。帝湯文武ヒ伴ツリてこゝろい司馬遷

中村俊定文庫

或ハ千鍬破ル
○千鍬屋經千早振
久しき心神ハ松
トキを枯しらぬ

俳 タハムレ
優 ヤハラノチサナフ
ユタカ タチマスラフ
優左傳杜預序云優
而柔之疏優柔俱
訓安ト

史記ニ云くやりぬと云ふ一説に太祖のうとさて
て儒仏老荘のむつまじ虚実をもてはぐくみ
へく実を虚をもてはぐくみたくへれ孔子に五常あり
仁義をもとき釈氏に虚実ありて仏論をやゆる
いつれも俗世の横変をはらん俗世をもつ儒仏と
やうけくはらて詩歌の媒とすいちはやゆる戒
まへ天の浮橋よりけんと仏くく伊弉諾伊弉冊の鶏鶏の
喻より天照御神をうけたまはりて虚実の間に
ろとはゆめむして猿田彦の鼻おうく天鈿女を
立たさしむ言に風雅の俳優とをれもんそうり

書名ノ時ハ
八雲御抄

口傳
誹ノモ歩皆ノ切ニヨミ
キタナリ 放逸トイフ
ナリハ他門ヘ對シテ内外醫
ス(カラスコレラ道ノ秘訣
トイヒテ師資ノ相承ハ
コノ謂ナリ故ニ法式モ
正門ニハ貞享ノ新式アリ

八雲のいろくに雅俗はの所いを言とあるつ歳書山
の詞をも塵とあつふ一日業にもしてをはるつ
誹諧のなをたつ業にもしてをはるつ
一弁をもふりぬはると俳諧と誹諧と音訓の論
ありて八雲御抄にも二名とあきられ二条良基の言仙
道も山風弁をふりぬるつわるきして法式も新旧の
差ふ口傳あれハ芭蕉家の書はもの人偏の俳諧を
用へしと宗馬に家訓の一條をもあるはて文明の比
あん心海の宗猫法師をそ世に誹諧の名あるつり
宗武聖一もれとそのひて百韻とはるもの句をはらぬ

貞徳は貞室と宗匠の名ありて専ら俳諧の言語を
作られしか貞室はやゝ芳野山の花を詠し（コノ二章末ニ傳ニ出タリ）
隅田川の月に吟して其句は和歌の深情にかなへたれ
今の風雅の根ざしとやいはむ其のち難波の宗因ハ
武城に•檀林の巌をうちて俳諧の渾覚（ミチミエヤク　ハシカル　モトム）ハ破られと
耳に言語のおかしきをとりく眼に深き情のさびしさを
知られハ其しこゝろよこそはなしといへむこそなき時ハ
其師なし其師なんるは其の弟子おしあるに実（ケニ）はよ
其此の俳諧といふは今様の人の頼口とおもひて其
よりて達者なる人も一般の渕奥よ至りて俳諧の

正ともわする人あれとも俳諧の心と作する師なしおもふや
いふ俳諧をもとむるに•居實の花よまもられて是を
齋門楚の後よあつかれ是風を和漢の一般とおもへね
況や其る上も法と作るこそ世情とあつかふ教とおもへハ
滑稽の心を吾家に傳りて△靈亜相の様と作け
て佛濫（和尚ノ名ナリ佛濫禪師）の禅を作るも△法然上人の道に
あひく善導の法と作り作ひよるも古池の
蛙よ自己の眼をひらきて風雅の正道をとへ作けらん
實を天よりうけ作よて自悟とも自證ともいふべき
世よいふ•誹諧ハいさゝかに俳諧にはあらし　芭蕉庵

圓覺經、修多羅教、如標月指

震旦モロコシヲ云カ

彌勒下生經、初會二會三會ノ游

度アリテ竜花三會曉トハ云ヘ竜

花ハ釈尊ノ菩提樹下ノ格ナリ

耆山章在投子會下爲紫頭

迦葉微笑密附アリ

舜犬之吠堯

阿提羅婆提羅吽

苍巖經、犬瑠璃

三般若トハ三智ナリ

仏經ノ五百四十函

宗祇ノ言義ニハ
誹ハ車尾ノ切ニテ非
諧ハ皆ノ切テ皆
（ともに合也調也偶ノ）
俳ハ皮皆ノ切雑戯ノ
（ニシハリメ戯）

と云祖としてあり
傳曰い一段と俳諧の根ざしてあり儒仏老の
ちりを基方おの故あれども帰ちあい虚実の
二ちりに今や俳諧の一ちとして虚実をあつ
仲をとろ媒（バイ）の一ちまて十論とけ〻て世法
附宜の二ちあるちと信をへ〻ちん俳諧と
誹諧の子論を古今集ちも敷尾文ちて誹諧（ヒカイ）
ちとちむへ〻ちを抵類をて。如実の法とへ
やう出皆文ちて誹諧（ハイカイ）と訓をへ〻俳諧（ハイカイ）と
論をへ〻ちを命馬のマ十二法ちけりされ

と云の口伝とちを故ちく如義を伊勢の事ちて
こちんを拙地の童ちちらく莊事ち仕官とちをき
洛の事ちて俳諧とちをるひく理本を書なて
朱点と加へる拙二冊ありて俳を實文の中此
ちん連句の新式を連歌（門連ノ方也細川氏ナリ）より俳へられ
頭書ち朱点と加へ或を連歌ちも俳へ
或を古今の序俳ありを命をれよち七人
の所あるちをきちて号ひをくふるちなく
俳ちて俳へちをふるち。かくて天和の初ちん
武江の深川ち隠庵ちて古池や蛙飛こむ水の音

しかる遠雲の一句に自己の眼をひらきそこなう俳諧
の一たをひらきまりきるいたれ言に俳諧の別伝と
論をいま史記の滑稽旨よりんと伝へて古今集の名
をひらむ（さと今ろを俳諧と詠諧とにちのく
新鶯の名をとらて天稟の一たと建立し
祝に平安の八九をひらまつ和漢の一二を
あらはすくろに文章自在の論といふへしちるに
中古の俳諧所をかねくそのこと持に上ちう
貞室を称名ちに三句に今の世に潜て
そそくとはうにめうに哉

いさのかれ宿俳の魁をひらく 紀貫之
俳やけ二句の姿情とおそ今の俳諧の根さとする
実に風雅の私あるんうを実に新四の差ぬと
信をへ蓋いむ所のかれをるに馬孟の
才子伝をんへ

地句意別ベフナレ今時勉モサカリナレハ郭ノ鳥ト云チレハ郭ノホレトヽ

才二俳諧道

おも俳諧のたをいかに平一に二歩実の自在ちに世間
の理をとらくをるれく風雅のたをあらふと世
第に俳諧の実活ちるこをへうんうを和言

儒佛の教ふるあんに塵寂の間にんとあるべき言語
の説と寂とをしへ一ぢやうに塵寂をんじやうもく[illegible]
不立言説あんとを世ふつ俗諦い義をのはあり
ちをを黄紙とをもぬ人のいいもれをもく義をのを
ををやんの天遊とえとて要人の仁義と後をれい
世法の是非とおもけて塵寂のをちにあをを
をををちを俗諦を是非とあつをいく今日の世法と
をくはもれをを塵寂の要を化をおをあい法と世法
の和説をはをく寂と一字禄のおをもれをを時宜
世法を立をるやををれい俗諦のをををふ儒仏を世

の高をはをひく塵寂を中庸のはありとい、ひけを
儒佛の大をを塵寂のをねを家ををけをを俗諦
いはれを仲人をををを一はをを一はをを俗諦を世法の
人和を五倫の常はををををを俗諦のをををを
はひをを風祈の祈ををを人をを人をけをををはを
分を千童の四維孩をかをを蕨一枚のさひををれ
をを口を八体の菓肴をはををねを一瓶の飲のはの
をかをををんを世法の要ををを美言を耳をあを
むを俗諦自在の人をを一をををに和合の俗諦を
宗徒ををひ宗徒ををふいく俗諦の詞いひはをを

△卓犖（タクラク）
字彙曰卓特立也高也遠也又事之明也犖ハ牛之雜色也或曰犖ハ事ノ明ナル之訓有
卓犖者超絶也韓退之進学解ニ卓犖為傑ト云々
卓犖ハイツル又ヌキンスルトリタツ

されはこそ俳諧の心を得べからん人あらば吾等は俳諧
は古人ありしとおもふをもひそかにいへりやむて家訓
の秘文となしおきけるをいまさら和歌の滑稽と論じ
むかしの俳諧よりいてきたるを今の俳諧にいたるまて
うたひいひむかしにかへて代々の撰集にはいかかの心ね
あらさる俳諧の詞の比興をとりもちて俳諧の心
の風雅とも得へからすやいてや俳諧の詞さへ杜陵
（タヽ古ヘハ誹諧ノ詞ノカルロノミニシテ虚実論ニダシク云ハ如ク心ニ大ヒナル虚実ノ風雅ヲツタヘス）
あり奇に思ひありて物の姿もとをくはなれぬる
それは狂言と俳諧とを分かちて例の虚実の自在なり
例のならしく例のあはれは風雅にて佐家遠様のあはれ

やまとの詩人哥人達は風景とかきり言葉とあやして
哥とつくり詩とつくるものいつれも上手の名をあらはせん
名人の場をもとむるに遠く人をのぞみて上手との
作ひはまをたとへ知のおもはしきも名人は一字の信
あるは信を万物の名ねにまかせる人は天地もうごかし
変化をあらはし雨をふらし風をおこし鬼神をもうごかす
清濁をこなしてひとすしに月をうつす況や俳諧
の卓犖なる信なき人の麁疑に於きては実に
儒仏の内説をもくらへたる人をも信するをもちの
上手をこそまことの法とはいかむ人の道にて

作とまり来るものの真骨髄（尚ノ帳面より傳ニ）を要略せ
あし釈門の仰菩薩の名をあらはす。頓漸の
法ありとまうす。しかれども古法にいひ
そなはるをもちいたまはれ。今代をみまもらせ
うのんでこそかなしけれ。詩作をひとへに誠とかな
むとてもとをくうとやもすれば道徳のこころを
おくれらと濫觴の法ありひく淵ゆるやく
風雅のむ実をもとめ一カ言葉と今の名作をひらく
あらず世本の姿とあらずあらず男女の情と濫る
こと能わずくうて言語をあらはすとくあさと

人倫をそこなひむ実を自在ちからやかくのごとくそのえ祖
とあおぎてひたむきそうす紙の上よりあるいしなと
長義をうけ下に十指のゑとをあへ天下をこよの徒あれ
ともくをむかへて仏諸とをうれるをくの信をまも
恬をもて我方の功とせくをもて武江のをよをもて在ちう
仰頂和尚の禅宗をもちいて投子一麻の第をもて話
とせうして仏諸のをひとを得をうれるをうち世間の現象
とをくをもれ風雅のををあらはくあらはく真の面を
をいり仰のをいとをくをうくあらはく湖南の幻住庵と山居の名
とかくして杜律の五言と枕をしかし集とをうをん

て貧困なるに肖ずつるわ玉帛の利も勝とおもて
渋茶やく方をうるとれの衣食の産もんとそ
やて遠さら椎葉の糧とたべて近さら杏むの酒と
さんさんくそなのるあとおりとしいすあり居る
七渡の計も仍て移文のうさえも立へくれ例のさい
く例のたくく紙店をんのあらいちらとそむ
たもやけるの功と論とを儒仏老荘の虚実とあつ
連弓の狂とたてあて国こいむるにあれい家あるよ
子あるうとき紙店い天下の一助品とつ一まれも
紙店の人を宮殿のもものもれそいあれ田舎の秋の歴

ゑ一ゆうて上京商店のあつ居ることかゝとを汚肆
嬉房のあてひゑらうに世界ゑ戯筆のるあれも
向上の一路をあやうたおとたらひく人と損をもけるる
ちんゝ人と益をもけるるちんゝ愛に之へい兵義い
さもく人を論ゝて紙諧をたねのそすもも
いつけ諧を我京れの貴金あれしおるその人せす
過をへきをや今をけ意と浄をんにあるはいな道
おはくゝ紙のあなひやをかんに左く世の人をる
ゝをさゝけ紙店のゝるれいをと虚実の懐をて
世店の人和をいつる也浄やけるの論沮ゝらあ

〇古今抄云
凡雅ノ二躰ハ漢土ニ詩經ノ所成ニシテ凡ハ虚ヲ以天ニ起リ雅ハ實ヲ以地ニ止レ詩經ハ此二巻ニシテ乾坤ノ二巻トハヒトシ此故ニ我家ニハ凡雅ヲ虚実二用ト見テ凡ニ懲悪ノ虚ヲ用ヒ雅ニ勧善ノ実ヲ用ヒ

そうもう傳とは段の公論なるなれば法あり
儒と仏とは実と虚とに分れ仏は虚をもとめ
て光華の妙理をかけ儒は中庸
のはたらきを俗諸の大宗師とするゆへ
の文章に六義の中凡をとりて雅と
ともに凡を詩として雅を四つに詞
とやくくはたらき諸教の大むねなり畢竟虚実
の摂化なるゆへ全く自然の真享成るゆへ
次に投子一流の茶に俗諸のたゝひとは仏と云る言に
世界のはたらきを詩とも其一を天地の真文とおもふ

そうもう人の学問へらてこれいこれらの
金言を世にはたらきて物の姿し孫とともに中に人間の
あるひあるいはそれはたの事地ちうとも
傳曰今以俗諸の一理を太極の一氣の動てあて物
に屈実の事あるゆへ或は神農の次世と写
或は黄帝の姿と作て史記にはかり
ねもうと中古の俗諸ともいはたと論ずるに
今の俗諸はけるとわるうるこれ〻と例の過當
あるゆへ俗諸の傾性とものしけれは自然
訳文とひそはかりの大言とひてはて耳論ずい

其二ハ人間の変ハ[illegible]ハ[illegible]
塵寰の変とハ[illegible]ハ人を或ハ天倫の変ハ[illegible]
恩愛の間ハ[illegible]ハ先ハ変ハ天倫の変ハ[illegible]
慳貪の火ハ家ハ[illegible]ハ塵寰の句用ハ[illegible]
とのハ[illegible]ハ[illegible]ハ塵寰の句用ハ[illegible]
いまや祖家の俗諦ハ[illegible]ハ例ハ句用の[illegible]
言語の世界ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
投子一碗の茶に俗諦ハ[illegible]ハ[illegible]
年の非ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

[地名也]
稽山章在[僧名ナリ]存ヲアケテヨブモノ投子一
日與茶乃曰 [投子山ト云地名也僧ヲ尊重シテ其地名ヲ指メ云モノ]
栴頭澆却茶曰 [衆也] [列也]
投子曰可惜一椀茶
[illegible]投子の茶と[illegible]の中に世界[illegible]
[illegible]
[illegible]茶と[illegible]
世[illegible]

ゑんきょに投ずるまでと失ひ[illegible]のこ[illegible]
れたるこゝにて涕[illegible]
る。笑中の刀とぬくこゝにこゝにまちの耳にちき
ゆるものの言葉にあたふ
ゆゑに世尊は仏僧とをもてはなれ
ゝこゝや[illegible]仏僧をもつてかくして其のはらい
あらて孔雀王孔雀とかさねあい国をもちゐる
ゆゑに失はしむ言とはるのこたるにて所詮の
口伝をこゝにもちゝや世尊おこなわれ慶喜
の間の系譜をたゝいて誠に幸子の喩にもと
十年の死は皮肉とちゞ[illegible]十年の法地と耳同

（サビノワクシ之多年ノ骨折ヲ云）

とあらゝ[illegible]致知格物の條目よりふひるはけそて
天下の一助をもふりもむ君をもやけ論の決をもふ
ゝ一子の信をもちゐて法をもねのそのえをつる
おのおのおのゝ子のおくゆるもなれゝ[illegible]
ゝ[illegible]仏僧の一ゝちん

才之仏諸德

おゝ仏僧の徳をもちゐて孔雀と比丘をもつ人孔
と於て天孔をもちゐかのとゆふ世にて仏僧の徳をもや文
ゝやゝゝを武ゝゝを武ゝゝを仏勇ゝ三ゝて智ら

三ツ性とあげたるかなかにしかも仁勇のなかにあることを云べし　されど
も智なきは二ありて世智と仁勇と和するにかなはず　真智は
仁勇と和して作むだなら張良が女児の扱なるに志る事し
そと我俳家の句馬に謂ふは俳諧の仁と読笑の諷諫と
いひ俳諧の勇と文章の頭挫といふ智ときさ俳諧の
機変に趣るものなるを志らざるは俳諧の風雅たかよりも
詩と哥連哥とみな詩哥連哥に歓とれば永のみ
もまた俳諧しく栄の朱をうつしてより家く
の主地にして変を建立の一行とも我道の風骨ともいへる
也志かるに俳諧の一流を立るも詩哥連哥のみならし

と云れはらん然れとも此性の真しあるべし　志かうして此性
とひねむる物をなす理と理屈とのはらひにして然れと
はらくち文章あれは文章のかたち言語にはありてはねよ
言語の聖と志れとも此れは理と理屈となす理は
全く善にして理屈ちて全く悪なりと云ふべからず
なす理もて善と悪ありて理屈をひとへに悪なる物也
なしく善悪に善悪の二あらんとやとあれ十分のなす理
あれとも君父をあしさまにあらそふれむに君父に於む
さるもなす理あれは理屈にまくるもなす理なるんとするに
なりれはなす理とやげて君をつきとほすとうるもかね

是程の悪ろ物なれども言に及ぶのせまりは水ならず
物語とあれるとまん言五ふら水と氷とのごとしおもを
世間の議も程の剛もろ非の一信とつるもとこてる
言語の虛實とまろこしたれるのるなりて人とあむう
もてなれを表なも詞とやるけて面白ふ人といさふ
つむるまろとしらふて人間の靈あり云れいる程の天
もて程度のもてへよく人あるんこるけれや世性とやるけ
て德の酒色とをいふへきやもてをるなりと程度の
ちひを許状を程度よりたるれく奉り頭人もいと
ひくをてあくを俗潔をる程よりまるれく大ろ云家

両唐ハ初と晩唐也唐ノ代別シテ詩人文人盛也

おりとをおのさまちるを言語の慣愛ろ。ろよ文章
あるよいひやたもく。清稽の記をまれ楚の優孟
ろ本椎の弓とたるをまくれ秦の優旃ろ城とやんいひ
淳于髡を鵠とわるくれて不信の辯とやるおて祿
とをまいり東方朔を酒とめるもろ延命の程と
たるくて首とまくれをまれを。張儀蘇秦ろやるも
王豪といさろ敵国とやるくけて文武ろをとふ名
ろ。ちるを。宋ろ文章ろ客難賓戯の俳諧
とちひ戦国を弄を利害とをけん闘秦の間いさ張
て要宋齊梁の中比ろ西唐の清代の盛ろ元明

曹操ハ天ノ時ヲ得テ其武ニ虚実ノ自在ヲ以テ人和ヲ得テ詩ニ遊ヒ吳運ハ文ヲヨクシナカラ虚実不自在ニメ人和ヲ得ス

の今にいたりて史書をよみ古今文武の人をいはゞ
仁勇の智とかねそなへて風雅の体をもとゝ
いふべきあたりにて四方別の敵をちひけ王運を文とし
十八賢の人をあつめ中の天ちをとゝ和の
人ちをひろめ世を和あり不和あるをもち
ゆへ俳諧をもつて類性の機鋒ありて武家の餘力
もつて学問をもつて詩歌俳諧の万美をもつて性
とはなむとあるを庵といひ宗といひあるを
よたくりをもつて人のんとをあるをよみ事の
感仰をもつて俳諧の門とかゝへてもとより

機變ハ変ニ應スルヲ早キナリ

ひろきをもつてもてなすをよみ過當
とあくまれく儒仏よりの徒とあつけかくをもつて
モ勇あるを詩をもつて俳諧
ハ業の要とをひけわつ
俳諧ハ世に機変の法あれ今くけこの性をみるべ
けて今日の文事にあるをふ一ちをもつ言語の
を鼓をして世をもつて多能の人を仰れ和をもつ
をもつ人ひとをもつてあるを世語を
ず家の密法をもつて調の鼓舞をもつてけるや言語俳諧
の行路難ありをふをしみをもつ上をもつ人の

上手ハ分別スレ故ニ人理トナリ
名人ハ我カ分別ヲ無メ天地ノ自然ニシタカヘハ天理ニシテシカモスミヤカ〳〵シカルヲ世間ニ云無分別者ハ我カ分別ヲ無シタルニハアラテ一向何モナキヲイヘハ行ノ中ノツロナルカコトク何ノ用ニモ立ヌヲイヘリシカレハ無分別ニハニワアレハ一足チカイ心得大違恐ルヘシトリ

ちらしてふるをはらふ庭の静さ　ちるにおくれぬ
いろ花の動さ　なにとやらありけると芭蕉下北
子ちれるも一方は故下の風狂人ありてさもし〳〵秋の
俳諧をせるなのあるとあるとの一語と
そうしてさてやうもく　ひちくれとさはしの論れ
へ師とやちりきふそ　あれとあるとを上とよりてこれ西
湖南とたの酒屋とまくとくとくとくとくと秋の酒
おとうむとをたちらふ再子のくいろ秋〳〵秋庵の
故とやとくふるとふとの一歩ふ里の大石と
きんやはるたおそらつきて此一部あんはをやろ秋

道理ニハ善ト悪アリテ理屈ハ全ク悪ノミナリ

死活

○ちるふるみちるふる秋
と秋いしいて〜
此句ヲあるキモノトミルハ死ニシテ死ニ行ツレテ死ヲトミルキハ活ミシ行ツレテ活ヲトミルスレ
○ちる俗ようちるちるめ
るるやいふくやり
ふくちるてくこ庵の
俗ようおとれ
此前句ヲ死トスレハ言傳ノ用ウスク死ナリ死ヲトスレハ一字ノテニハノ所タトナル

と秋屋とに善悪のことを立てるを傷仏西つの八ようを
花荘一系のこ方言もいやとと秋さる不ちると俗諧の
世ちら要貶のこ方とはるくはけそ秋るのこ言
つちふちるそと世ちよ用れくくふとの文とやつけ
てりあるとあるくふ倫のるとやふれそと俗諧と
用れい附句と附句とのの死活とちりてはるちるおは
俗諧ふれるも一子一點のよ秋はちり要化とれくと
新ちんいそそ　それの陰晴ようちくくいとへの喜怒
とあつふ方や況や世情の附合ようけれの所ひちんん
ちそをみも武も論ようとなるくはけれのちるさん

て人うの世性よあれてふ人と有性の作とて天一さあり
ちりや仰書の應接接物も花柳の和光同塵も論語よ
賢愚親仁も畢竟を世性の人和とうも和と温厚
の二とちうとをうれもを家の一節うて言に一般の
眼力をたうふ命もちれてそうを性よ仏ようを性へ
文をもてかやうをうをうて武ちんやうを武うて
文ちうんやう武を天下の治見ふれをもかまくも我い
の学ふ者達を才一ふ俳諧のうと性とをあうふ才二に
俳諧の法と式とをうふ中をうをうを五老ふ居さる事を
たうを性を活弄に及ちんうをちうてうを教ちて

○師ハ学習ノ師ニアラス自然ト道ノ模範ナル師ニ
大宗師
荘子ノ郭注云雖天地之大萬物之富其所ニ宗而師者無心也
○字彙流派所出為宗
古有大宗小宗
○公事ノ理屈ハ奉行頭人ニモ僧ニテ勝テモ負ノ方ナルヘシ
道理ハ物ニシタカヒテ負テモ勝ノ方ナルヘシ

うをうを慎ミ徳と虚うして和と言あり八分南者のもに
そうあれく世ふ業の習のおりちも例ふ条のけあんを言系
て測ぬを徒のうちりちも戸ふの面にもれて
の間ふ世法とちをうて俳諧ふ誹木諫鼓の用とをう
俳ハ一段を骨節うをうを世属のちりひより
世性の温和ふ性とをうしうを我ふの大宗師て
をうふ俳諧の内徳とおうを一一弟ふ中ふの系にをれて
天倫のおれ釈味あれん利歌ふおれを歌ふかりて
仏すの理論とうのむ人あんにそと教訴の誠あり
物ふ勝負の公事ふやうひちらく一ふ倫の教切と

之を以て始を物理の二言より中庸を清稽の人とあり
て孫を例の世情あり
人和を強果の力とみて智仁勇のこと言を孫語
を論語の和同礼節にて使子一篇あり
是ならや此論を白馬の遺訓と伝へて
はを人ひとへ称をもつぱらはをくとあるを
先を仏教を遊戯自在とも仏家の洞を地行仙とも
みれを禁庭の陽あるを史記を清稽の隨一
とを東方朔の俳諧の詞にて言を俳諧の始
をあるを信を一へをあるを孫を

連を以敵しねを孫を連を以て終を慎の
二子に虛実とをあるを孫を俳諧の家風より
天下の人を名頭と世に（トリヒシグ心ニテ人ロヲフサギコトハカセ也）
誹木謙鼓の用あるを彼を信の二ようより
世を不徒の一ようにをえ中かりをうけのあり祝詞
あり付を家を家をあるれを孫を盛のをを
以られを徒を用ををあるを孫を俳諧の
西鶴より相下石上の陽あるを屋中の人を謀を
をを権威の家を家をあるを孫を大義の一粒
をれをもれをもを孫をれを人を人を誹

理学ト道理ト

和漢ヤ夏ノ行ハ

竹堂

や性をかれるに作くまあるをもてしてちくまの用
こいかゝまとるる論語の節を稍とをへ中節をもへをとけ
論の音節をもて人らくけりより仏語をへ一書をふ
如書を渕ぬの一對を例を錯綜のたるく事を
作を虚堂の頌をあるをもるを返魂の術あるを

才心虚実論

たゝし仏儒の虚実をを例を言語の設ちをりを
と仮説の雨翼をもてたれを変化をもるをもを
をれをを虚をを実をやゝけををを虚を補ふ

○勧善ヲ先ニスルモ懲悪ヲ後ニスルモ儒佛ニ教化ノ用ナルニ善サヘスムレハ教化ト思フハ愛ヲシラヌ人ニシテ其人ハ実ハヨキモノト思ヒ虚ハアレキ物ト心得テ師近ハウソツカヌ物ト思フタトヘハ弟子ヲ叱ルハ師ノ信切ニシテ弟子ヲホメルハ師ノ不信ナル所アリホメテ善シスムルモ叱ツテ悪ヲコラスモ弟子ニヨツテ先後アル(モ)

をれのをををかををををんをををふ儒書を実ををを
仏教を虚誕をををををを人をを。勧懲の先後ををを
をを詐偽の虚実を虚をををををををををををを
虚ををあをおををををををををををををををををを
称ををを馬麦のむをををををををををををををを
をあをををれをを虚実の純文をををををを華
を要ををを権顕実ををををををををを論語
鑑をを。毋必毋固をををををををををを
二方後のををををををををををををををををを
れををれをを儒仏の言をを書を理の奥義

○連哥ノ実ニモ裏ニ虚ナカラニヤ俳諧ノ虚ニモ裏ニ実アリソノ変化シシラヌ人ノ云コナリ

○教家ノ実ヲ禅家ハ虚ヲ以テモトク物也

あるとも世ようの連哥を宗として俳諧い虚頭なり
と云人も例の変化とまつ知へしいつれとなるへしやと
あらふかと侍へしもし世ようの俳諧のこりにとらへて教家
と禅家と此二道のこと此俳諧を連哥とも云
とも云はやまるとも或抄云ふ云と侍ることを和哥
いと実とかとて侍しこと自正しむ実のそなはる
とて世ようといれとも云ふまつ云しいてをよ世ようの
中の所も男女の中とやりけをよりあるとも
あくさもとそうあるやうに実とあくに和哥とも
へさ・こ虚とあくにあるとしくるしくたもしく

和哥の鑑あるんとして古今行の万葉のむ実とそ云へくるる
所人哥の実とかの哥の作制をし地続の作詠も
実とかりかの作とかあるして作衣の袂とぬらしたるもや
実に一面のるとむくて山と晒とあるとやはり山と虚
とかとして六義に虚実のあるとあるとしけれ
五義を俳諧とあるとおのるあり上よに迂詠とたく
るあるとして例を俳諧の端的(助字)侍るして虚実の自在
の人をあるとあるきき芭蕉行下の一振(つり)あるとたくく
虚実とあるとあれ・虚実の虚実口伝とあるす
と俳諧のるを此一大とあるとあるくしく一向るきとぬ風祈の

(虚モ虚ナラス実モ実ナラス特タノ心地ハナハタ意味アカレ可考ナリ為辨抄ニモトクト見合スヘシ)

人も虚言をいひ真言とかまへて世俗の耳をよろこばす
あれどもよくよく虚とおもへど実とおもへる
も虚は世をうつして化におちて実は心のたのしと
おもひるむ荘子が此論も虚より万物をいひ出す
実より又倫をおしてあらむたしかに言で荘周が喩も
実をいふや虚をまなれば△婦姑のあらそひはまことに哉
実に虚実の事を論じて実は好悪の二にかゝはりて
虚なる人はよくの事あるべし実よりは又倫の道を
いはむに実は忠孝の外に似たれどもその△女言の耳に
入る人は其のまりのんによりあるとかのまゝにきまをもて知れ

○文雅ハ虚中ノ実アリテ一字ノ信ヨリ鬼神ヲモヨロコハセ武略ハ謀コトノ虚ニ欺ツイカラシムル文ニハヨロコビ武ニハイカレル其虚ニ喜怒ノ変アルコヲ見ルヘシ

人は此国にゆゑて其の恩にたむさ辞家にありて文の
名をとゞろかせらすこゝに実とよそに礼をのへおそれと
拿られるちそひの事らねどされく首を振の許る
いふらし実のよしありて此二に道さりん依て虚とふ
るは虚実ありてやよ真へさゝるゝは遊人の放言ありんやよ
勿まゆるは佞人の諛言ありまうちて文ともには春秋の名
とするは武をもよき略の法とするいつれも礼に同じても
て千里の外の工面なり○文雅なるは同じからぬ鬼神をも
よろこばせ武略（謀し）なるは怒をもあつめてもかし。むも虚
（文簡ノ計リコトニヨツテ忽一死スルノルイし是虚也）
喜怒の変なりとや況や聖賢の典に於のそるるよ

此虚をおさへなれと云役は説とよせて也けれは此論ハ
言語に虚実の自在をいはく利害の変をきれとあり
然れとも虚実の大小を論ずれは虚をおもひて実を
ちいさしとせよ大ハ針のちいさきにして其間に形のおなし
うしなふことなし我あふ針をとおされさんや人あれは形
とそなくへきや△荘周も例の此形とおなしからう此虚
実のかさちくちる紙されとて虚をさうして天地陰陽
ありも実されなりして君臣父子ありこれを大小の論とは
いはれぬを先ねの雜をやいふむせられ（コレヲ大事ノトコロニシテ）実のひやく
其虚の訓らかんずる実と虚実の虚実にして其の

○且虚ノ危カラシヨリハ世ニ行ヒヤスイ実ヲ行ヘトハ道ニ建立ノ口傳ニシテ然ラハ其実ヲ行ハンヤ評ニハ祖翁ノ論者ヲ勤シテ試ニ笑語セシ歌ナハカノ牛刀ノタメハムレトハ詞ニ表裏ノタカヒアリテ例ノ実地ニテトイタル人ニハ変シ讖文ノ口傳トアレハヤハリ其虚ヲ行ハンヤ学者変ニ自悟スヘキコト
○大学序ニ異端虚無寂滅之教其高過於大学而無実
虚ハ高シテ危ク実ハ低シテヤスシ

△天下をまつて遊やまくかの地獄まで入かゝしとそうかれ（世上ノ人ノ上ヘニテハカリ云タリ其実ノ行ヒヤスク其虚ノ訳カタシト云コノ外ナリ）
もろこしまで先ねありそれよ好物ありてせるよと入るや（実ヨリ入ルト虚ヨリ入ルトタトヘ虚ヨリ入テ実ニ出ルモ実ヨリ入テ虚ニ出ルモ一ツナレトモ世ノ人ノ取安キヤウニ実ヲ行フカヨカロト云ハセタマフトモ心ノウチハ虚ヲ行ヘノ心ナリ）
とと去れいこそ虚の危うかんそこそこの隠がある（翁ノカクニ云ハセタマフ）（変ハ一道建立ノタメナレハ）
りうち口傳此語を我家の讖文として実よ新安の末（讖文ノ白傳ノトコロニテ見合セヨク翫味スヘシ）
△子として太宇の序を背ほと変て儒佛の内詳とも（未来記ニシテイニタ目ニ見ヘス先キノコトヲ）（ヤスラカ段ノ意味ハ為辨抄ノ）
あるゆゑし此ねよ長為ら虚まるかく実とかこあふに（讖 説文ニ験也凡リ緯ハ皆言將来之験也）（俳カイノ意ヨリ看破シテミルトキニハ）
実とあて虚よあるふへうれとそ白馬の法の第一義
うて人のそくするあとそうる太宇の欄頭たかうるや
そを青それ子の遺識もして△明性の明も虚実といひ
△新民の新を変化といふるを要とる虚実の二法

緯ヌキ 梭ノ横ニ
又天象定者為經動者為緯ト
又緯書讖也

〇虚ニ居テ管仲カ仁ヲ行モ実ニ居テ伯夷カ義ヲ行モ両翼ノ用アリ

より変化とあるゆゑに虚ん今すこし虚実の先後
と論ぜん虚に居るへき是非をさらに設ん言の内にても
に耳とあはせし先實に居るへきを欽ぼとまけて金石
のちぎりに命とすてきと彼ぞ仁をして其名ならめし
仁義に好悪の要あると云へし あられど虚に居るも
實に居るも例に両翼の用あれど虚実の先後まる
ぬもあるへく虚々の是流と云て至へし 何をそと
虚実の法をもて云は何もあらんぞと人あり
て居の字とせらあむに彼も虚に居るへき事ちまち
實となり我も實にてみるへきと能ちまち虚となるむ

（居ノ字ニ心ヲトメテトカムル躰ノ人ハ変ヲ知ラヌ虚実不自在ノ人ニ彼レモ虚ニヲルモタチマチ実トナラン我又変ヲ知テ虚実ニ自在ナル時ハタトヒ実ニヲルモタチマチ虚トナラン此レ其実ノ行ヌ其虚ノサハキカタキユヘナレハ也）

（虚ハ行ヒカタシトイヘトモ変ヲ知ルトキハ）

〇変ヲ知ラサル時ハ虚モ実トナリ変ヲ知ル時ハ実モ虚トナル

何るそ云實のおこなひやすく云虚の行ひがたきを
ありこれらに自在と不自在とあるゆゑなるべし
三虚ニ居士の遺言も頼くて世の所有を空して所無
をも實とさてへよに云ゆる畢竟は虚実の論
て虚実の虚実も此ゆゑ也人は此語を左右に撥て
起に居るよそ意を工夫すべし
傳に日此一論は仏説をもかたくれむしろ軍陣の力
となして儒者は仰ぐべきもあるべしといひ仰ぐべき
儒書よりも行れりとて今いふ仏法にも虚実
あれば仰ぐべきも虚実ありてあらわす人は字面

○虚実ヲ色ト論シテ是テモ合点ユクヽイソレテモヽタ合点ユクヽイト再三論シテ終ニ虚ニ居テ実ヲ行ト居ノ二字ヲ論セラレタ誠ニ道ノ親切ト云ヘシ

とそのいく言熱の表裡をあらわすに成へし
偖や虚実の説ゝ迂・詐の真言とつふるの論
真言の迂詐とつふすありてをしと唯仏を仏と
ゝ四眼の仏ゝ成れいを仏をあらいかをふ
人もあらんをるにも虚の危ゝんよりも実の隠
とを祖師の論をとゝ動して誠ゝ心を詐ゝ不
あれいかの半刀の戯とい詞ゝ表裡のをうひありて例の
実地ゝやとゝいゝゝ人ゝて実と・誠文の仏といふ
忍ずやい論の熟仏を虚実を再行て居の二字
とゝるをゝゝ般若の六百巻ゝを智の一字ゝ新

（其虚ハ先キニテヨケレトモト云ニ等ラス虚実ノ虚ハ実ニテ同ジナレ是畢竟ハ遊戯化不自在ノ人ヲウヲカシテノ玉フトし）

○実学者ノ朱子ノ語ヲ以テ虚実ト変化ノ公案トナセルソレヲ大集胎換骨ト云ヘ又法也

ひれあをゝんこれゝの叮嚀ゝを遺ゝ況や孔夫子
の遺書とひをゝ庵居士ゝ遺言をありをゝる言に儒
とをゝゝ仏とをゝて虚実ゝを叮論と強ゝをゝる
ゝ墨ゝ叮ゝ叮公論を馬麦牛刀の字対ゝて
法華ゝ論語の要文とありをて文武ゝを虚の
喜怒とゝけをゝん針船の喩をゝらゝて故実
金石ゝを意對の所あんゝて太子の叮顕とを
ゝ彩の二字に注あゝとゝをゝて仏語の宗の云まを
とあゝるこれらゝを大事胎換骨のゝゝて宗に
我門の文章ありゝとゝの為

（カンバシト云フカ如シ）

才五姿情論

たゞ俗語の風姿風情とこそ称して古今の差別あれども
古風を耳にそなへたるとすべて言語の上の姿をとりてもとも
今様を用ひて姿あるべくこそ言語のおもむきにもれい
たるたのしきにて今を姿の論くもるべしあれども
姿おろそかや所作の事まで姿あれいとはなきを
あらためて作り用ひの姿をもとりたん言語の姿をもの足
らくきにもしてもこの風と称とまるべきもの
本男本女にて姿の論をもはたん今の風言語

台文は秘訣
ト考の立也

の姿所を俗語所の一大事なるべきや作者もく姿作の実義
と論とを人を天地の姿にもこれと作者を只論
地とつゝしもこの姿をもたるべきもあれ天地を人の作を
るるもあれ人と姿の同じさして用ひて
天の姿をとつひ事の本をたるして地の姿をそる台文は
秘訣も言あんもるべ姿作者をねもと
味をもしるべきもの天地の間
ようりて姿を思ひ者とにあるいをもを作
を姿にもるべしあるべきもあれ
姿の論をもつゝ論上天文のたるも甲書と称され

いたりてあつり公衣食と供せられ孝性あらつて世人へ
あつて拙をえあつと論とへ云又のおの論とくらし
めに森て森くたなのはたとたてて一ミや次のえちる
を論とるに及ぶてけれ人佛の疑うも五逆の次をを
地獄と云ひて鉄の門と鉄羅刀とをもへ十重の
罪をと拙手と云ひて玄の玄に笠菓をかさる
けると傳佛のあくそれよ玄手の拙たちもあん地獄
拙手の罪を逆謗あん人と逆謗とうらへて逆謗と
疑つたれと祥誌うを繫駅(ケイ)(ケイ)ハシラ
仏師よ方便あれん傳書うも工面あうんやえをを
（何ノアタミヤマト云ノ詞也馬ラフナノ柱也）

○方便モ工面モ虚ニシテ文章ノ姿ヲ形容スル物ハ虚ナリ

○情モ俗情ニシテ雅情ニアラス

の姿をいつもみやも中古の俗諧を双六世の
歳旦とて月ものと詞とむとひ表四の表をを
ひたく歌ひたけるをれさへ拙のをうて風をを風ち
いをうををるあん謡や今の俗諧とて古俗の
謡と姿とん作をを作をを全くあるを似れ
を風体をを年に合する風雅の餅作ををけいいも
ひをを俗諧のをあんや世くの作をもけ姿ををを
い本古の廉子とやいうむ美に連俗の姿拙を論と
月むとおもをを古今一性をを作ををいををを連俗
もおを姿をを作を音連俗ををををををををを

（双六世ノ歳旦ヤ大目出度ト云昔ノ発句ナリ）

・よつ差あり傾くとなけれども一百ゑのあるそなりてとそこの
連俳をおろ〳〵ゑらんとゆけども是ゑ廣くして本体に
次かつりて俳言連語の論ゑ及ちん世うゑ
連言の体をもて俳諧の姿をいつもりて俳言とい
ふと雖ゑ〳〵ゑ風体ゑ〳〵ゑ古ゑとたらわれて風姿
いさらに新〳〵さを求れゑ新古の時の附合ゑ〳〵ゑ拙の
変化ゑ求ゑ〳〵ゑ也求れゑ〳〵ゑ求ゑ〳〵ゑ
・連歌ゑ求ゑ〳〵ゑ俳諧ゑ〳〵ゑ求ゑ〳〵ゑ
いつもゑ人ゑ〳〵ゑ端的の不ちん変ゑ俳諧の附合ゑ編
ゑ〳〵ゑ句の姿ゑ〳〵ゑ句の体ゑ〳〵ゑ

けれゑ吾ゑ耳ゑ〳〵ゑ俳諧ゑ〳〵ゑ用ゑ〳〵ゑ
ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ耳用ゑ〳〵ゑ姿体の体ゑ〳〵ゑ
〳〵ゑ体の体ゑ〳〵ゑ言語の姿ゑ〳〵ゑ
人ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ
ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ
ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ
ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ
俳諧ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ
の〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ
ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ

詞と失なうて或らんを好むのたとへてんとあるをも
耳とおとゝ仮なるをもまた言語の形容より
文言の麗実とそなるをんいさや殊乃の俗俚を
変化して新古とをうのまたまた新古を言語の間に
まるかゝりとまりてこを言ふ儒仏神乃とあつうひ
そを語ふ法をそ虚言乃とゆかりを俗俚を言語の媒
も新古の間ともまるへきも

傳ひけ篇を全く俗俚の論ふ〳〵天地ふ文の生ね
り君たる父なの語ふをたり儒仏ふ文言の語を
あらをいく〳〵異言を虚俗の語ふ花とたるこゝる

没や言語の変ふり耳用ふ物の差ふをえる
るふあむ〳〵ふたる文ふをやふに物ふ叮嚀の信あり
て人を俗〳〵傳ふをとゝ〳〵ふたるやゆ故の語
をてゝをゝを温故知新のゆまをとゝて俗俚の示の
仰の説〳〵あをゝゆをゝふに耳をかゝるゆけんをい
ふに眼をゝを一一蓋いむ古文の秘訣ふ簠簋(キキ)簋(キ)の
詞ゝやいまゝをゝも結語の儒仏神ををゝて行ふ
虚言ふ新ゝる神ゝを行ふの詞をおゝふて見を
拙おをなのはふゝ〳〵ゆをまをゝて三様を新〳〵おゝむ
をゝをゝを乃の一格をゝんゝ

簠(ホ)簋(キ)祭祀盛稻粱黍稷之器内圓外方曰簠内方外圓曰簋

第六俳諧地

たゞ俳諧の地とのみ孩のうつくしき事地といひ降地
うつくしとひとしつひとしつ今様の風流地とのみあり
節しらべ曲をうつす中の要ことばあり人をもく儒仏
の大乗も勸善懲悪を地形として仁義礼智に
王道の儀式をたゞすべし殺盗婬妄に地獄の苦をと
ひたるいねこ仏の説法も世界の耳とおとろかす
七宝の華厳をこゝろとして何の曲もなく節も
あるを阿含十二部の骨折ありあるを擬誘彈陶

○雅俗
玉味噌トイヘハ凡雅ノサヒシミアリテ白味噌トヽハ
俗質ハノイヤシミナシ爰ニ其
其ハ雅ハノヨキトイヘル
実ノ立ニシハ俗質トナリ
其味ノヨシアレトモカハラサ
ル虚ミアツカヘハ凡雅トナル

の心教の次第を感ずるにたゞ論語としるしの
法家の文章にてくれるを人とあつまる論法のおく
やうに助語をくんとぬくもあるをくれるけるも要人のあと
実て虚実の節をしるしのをもて七章も過ぎん
ぬるを人の節のあるをんも例の笑ひ言をもて拙構人と
あさんして例の笑ひも俳諧也節をあくの骨
うて一を建立の大ようをもて今や法をいひ
奇をつひいつれをもて俳諧の地とおもはして主のあるさにる
あんをしてを俳諧の地としてをなをもて俳諧をなを
をれを雅俗のちのいとをもるを例を虚実のあつをひ

より例の風俗のたひ〳〵ちがひといふに今の世の婦人婦
とかわる〳〵さまざまの俗語の席ふるまひもまたのの
ちらひたるさまなるんやあるを人ふんやせるを
ふ所の風俗さへ骨おる不て秘する不い
さ節ふるさまにたるいさまの詞の面にさまて始ら終
あるとかくむさを色とあるくかやたてあるふ
況はまに自然とそなはるかたちに俗語のかた
ちるや音人連音の音とあるへて亜へさまをしけ
すも今ちる遠国の俗語とをけんたまくの業と
異ひあるそなれる中の音と音のいくはとふわと

師とふるるとあれてあるるくとふへと俗語を
いおとりちるおをを実れらふ和訳をはて
馬と心はの喩ちるへしをあて高義の音あんも
それと癖をそふつあに人の音のもこと癖や男に
人間の地と俗とのはるを飯に茶とのをて茶父の
あのれとををれに男女中の交とををへをきて
月雪花ちるおれの風雅の性をあるもをれと
こ媚也ばををを及ばんはれとは時の佳節あるて節供
正月を調とあるをを章入嫁取の時分おに
深地の撰おもはをるをををやに人を對をを

詞はひのもとの婦女もんかんをもれの俗語も
世話とをるれども物のい節くくを儀式をもて言伝
云用のこ物あるこうして撰集をはりをくこと
の人こゝをもれとのうはまくよ世節とはをもひとり
俗語の地をもうねこゝ地のうる俗と自在をれい一言
一言と金玉のあり好すのあの耳目をおとろ
ちらむやはちれをこをもいとをもこのふくをを
十年の孫曾をんに彼ふくくの俗語と論をい一言の
絹をもをへて天下の紺屋と雖とをけて雖衣
をちくあくと俗をんけ地と俗をんまをんと

いひ儒はうをを恒心とうをれもをのふうをてんと
ゆをれをあをあをわをかあををを和の俗語は俗語い
何のあるるや君をはをあけ父をを子にあをを
夫を妻をむひををを身をををてかるるをを言のを
いひをん俗語をちをを今日の用の放逸をんを
をを和をもちひ人をもをををををを人間の地をふ
るをを命
傳曰は一笥飯を人間の常をををれのるは地を
ゆをちんけねを音人連音に第をを食物の
放埒ををりををる俗語を一箇の孫勝地あるを

と信ぜしめ、諸に花嚴阿含の三藏よりはじめ、
とあるいは四子に藏經の次第といひふるし論語ハ
「釈迦一代ノ経々ヲトキ藏ヘオサメタル工ヘニ藏ノ字ヲソエルモノナリシカ」
ちとくよ助辯とかいはれもその虛言をかくら
さる例の儒仏よあみくられ例の文章にてやうちく
ちやちると論語の隱伏るもいまだ一節の
ちくと係るる諸ひ仏の一脈ありて爰と云易
よ看過まくて同に豆といひ
「千手ノ八部龍ノ云トモクロムトヨミタル文字ニテ龍ノ手ヲ云ヒ其ノコトク成タルヲ云カ」
沙達ニ三節をちくん驩龍頷下のいくと
ちくこてはれそ人間の地よ僂ハヘラスとや書ふ
君父と男女と此一ふをれ交の三まとをて昆弟

○道ノ虛實ニ中ハラヒ儒ハ實ニモアラス佛ハ虛ニモアラサレハナリ

○人ニ一ノ地ト云ハ常ノ人ニシテ常ノ心ナレ如ラスヨロコヒスト云結搗人ニハアラス仁者能好惡人ト云論語ノ論ニ一ノ知テ虛實ヲ求ルニ針ヲ常ニハ無今日ノ人和ヲイキリ

○雙関 是二物ノ以テ上下ノ働アルヲ云也 君父ノ前ノ礼ヲワスレス男女ノ中ノ六交ヲタカヘスト君父男女ノミヲ云ナカラ

○こなき 牧子ハ俗ニ仮借ト云ハ七月ハ

○ 翁 龍ノ云

○ 牧子ハ

一說ハ

明友の文偏と含るそと雙関のみけしとしるせ

才七俊行地

おもも仮借の仮りとそうとあとくに房ろもむ
より儒仏の学ちるも仮りもせんへりすくそて
うをはりかいことをるれとくらかり諸と却しわく
あるて虛学の慣人とふりあるをふよちるれ
婚人とあるまして仮借の虛閑ちる曠ハく弱と
れをあるてこちのぎちくぎちよのをををきくも
思ひとかくれのもちをつるんのよ孤のかつをかくふん陳や

和漢の人はさて伊呂波とあるいは丘乙己とおぼゆれ
ど訓をうつ三月きうて先とて文選の始かれ
たる真賓を磯の波の沖よ詩のうれんうら三線も
ひろうて茶の湯もおぼしうちてくいそとおんの
猿のそもはたくあくくとうて一藝もあるといえて
えうて況や俳諧を学ぶかりは和学所の式もはく
もて里村家の接もまこはれの作風をとのうろことを
て学もゆきく作もゆきく書籍目録を拾うて
も起るもりるて廿年立まの俳諧をうひく史記
の俳諧をうふ拾うてあうて世ふふ唐人の雅言
あうへ

はもいく儒仏の作よりも四てを見ちうこうとも悟了
同未悟ともすうこうそうて先へゆけとうへあうれ
そうとあうへ（唐れとのいいもあうこうあうさへく
い拾う五七の字あるとあうひて発句の拾うも陪合歌
も作一会をかくの三へくきくひをかくのうくく例の
俳をえうひく。そうねとうよへしはて俳諧の世作をると
きれい俳諧をはねのあはをあ七五七くの句はうう
て拾もうふれいへもいひきはもをうりあうもも乱
い百日の功と金をれとも廿年立まの俳諧ともを今様の
要化をたおやうふんを実に老俳の為俳を拾うも

例之俳諧の師匠をこひ親たちこびるやうにて
息子をあゞ[illegible]といひ孫〻世代の憎愛を
あらはすつれも俳諧の座敷とまつわる例の乞食と
なりかとにもしらぬ[illegible]
命しいさとよ秋の俳諧師をそのひて十年の功と
はゝ[illegible]の俳諧の眼をはつかして媚るに人柄の濁
あり[illegible]俳諧を手ほどきの詞よあり[illegible]
あくはのゆるゝ七拾の秋とやゝけて俳人今日の世話
ゆゝしとて咲の松此ゆも涼しく十年の乞とあとへ
戻れいおよ骨おりてんまるとのゝ[illegible]

門弟の風流も花とるの風情も麦苗田植のまゝ
まちをおもの時はゝりて捨の世界のおくにも秋を
夕日のゆ〻〻[illegible]の考賞のさしにも家内の
遊女を紙子にかゝりて[illegible]おさまるもんみくけ
田舎の治郎を蓬生とまのはく鹿ゆゝふもあられ
ある武士の勾配も大工の書棚も世界よあらとなる
すを皆くゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝき言と[illegible]心和説も[illegible]俳諧[illegible]嘲もわ[illegible]
七拾一人の清稽を我家の俳諧よ伝へゝりまるに
ゝゝとあゝゝて戻ゝゝて高もりにさとよい

ありけん此のあるべき宗匠の追刻ありて老者の道を
切字の手爾をはのおかし才ある韻字の秘傳を
かすへさせ今の三百年の傳授とやらんいひしを守りて
一句やすらかなるをおろかなる人と信んとおもふて學を
今の師匠も剃髪されたる後の言語を辨へずしてたゞ俳也
されば俳諧の道は大かた此十年かくのみ附くにやあるを
又思ふに十年還る時ハ一ト昔と見ゆるとて程とある
それ故の馬車行しておのが門を作る時ハ廿年の
功を積むる俳諧の上手といふ者ハ古今に俳諧の
名を不知と論ずべき廿年の下手ハ論ずるも更也廿年

の上手と百日の下手とも場をおなじ 楽に出てはたらく
馬と云ひ大名とおなじく車と云ひ京都と相撲ふる俳諧ハ
三百日の撲和よりて或ハ京都のとくはいかなる或ハ
此折の附合よりて程よく稼ぐ 附合の変化あらんに
上手もまたかりても相撲とならぬ下手にあらず
其よしにかなふ彼も十年の始めを下手とよばれたる
まあまりある事なし其も十年の始めより其の物程
の物程よくみえて明暗のわかれて道ある人とも
ひとつ手ふれてあらはし真に上手の下手に似て下手
の上手ハ真似さるものとまかるへし 二十年の稽古の訓にて

唐ものゝ誹にて肖しかくて俳諧の俗体をまて
仕くも選もおゝ（みちく）ゝ紙ちるに虜りて有里の
俳諧にあらぬ二子の媚うゝの書うんゝ爾の頭に
板木とさして世ちく我ちゝ入角うゝに
作品は一段をおの抜ゝかりて例ゝ俳諧の格
ゝ次の海のわゝに帆をあげゝの休の言葉
ゝ老とちゝとちゝゝ今様の竹枝も似ゝれと
美ゝ雅俗の大ゝありて十段の中ゝ変化と
全篇を世間おゝ角て眼おの俳諧とも
て七尋（シヤク）八貫（カン）のちゝとゝいゝちゝる古人も言と

古文ニ淵明ノ言帰去来とも帰家隠坐ともいひきり今ゝ論者
の一子録ゝちゝらく郷家の俳諧ゝ字ゝ引ゝに
（禅言ナリ）
雅ゝもゝゝて全く俗俳ゝ話の中ゝ詩ゝの
同流とゝゝゝゝ世法の一ゝとゝ世ゝ詩ゝ同
とゝ今の暁ゝちゝゝ時宜の一竹とかけ
ゝゝれゝゝに叶論の新説と記ゝんゝ言おゝけ
一篇を十論の中の刃（ハテ）ゝ文言の花変とゝ
ゝゝ中ゝあゝゝの駒の形容ゝ芝生かゝれの古言
といゝゝゝの一子にいひゝゝゝゝゝゝと鎖詞の文
ゝゝゝゝゝゝ里の石節ゝい及ゝとかゝ

春秋とあつて明防夕暮と照つあひ云々
あてひて哀示と云れさるを命てて士農工商
とあげて言に隠れんの文法とたく言に互照の
文格とたくさん文やうの對類とたくさるそと
俗諺の文徳といはんやうやうさ云々の上と
下よとに百れの器用者と形容て古字に
あるをと移くさりてさりて上よの下よと似く
下よの上よに似くさりて白馬と一條の訓言なる
とを引きく俗諺のようさりてふて同に花用文法
とやふひくさりて解牛の姿と写りに韓愈

の論とこのちはたくさて獲麟の作とたくて
意を儒仏の中庸よあてらむとをしれる俗諺
い例のおうくく例のさりく例と世法の一節と
たれとうれをちくれて文のうち句として
長短と叶へさりんやうのて尊卑と對さんと
ちうて假りて真んくふさむに一字のそえ
もちうんうをあるを四六の文法あるより
言人連言仰のようてやうれてたれて俗諺
の訓詞うて額と本體のちうあくとも雅言
孔と樹たやとれれくと不根の持論と

たれも言語の姿とたれも中人の感深もいとゝ
はなはだ儒仏の歎呵するに似たれども不虛とも
不實ともいはゞこと談笑の訛誤にて過當な
例の虛實にはあらず一篇のよろこびを
俗をゝ天下の俳諧作と言ふにあらずして婦子とする
ものも尚あやまりに非人とゝひ婦人とゝひ上ゝとゝ
とにこの以をもつて世民の婦子たとたくさん
世に俳諧の文章をやるいとゝけ一篇を
遂ねて

モテアソビモノナリ　子ともハレナリ　天ヤウノ

深澤